生徒が言葉に着目して、確かな学力を身に付けられる国語授業

―生徒が自ら「読む方法」を獲得し、活用する授業を通して―

新発田市立紫雲寺中学校　神林 拓馬（平成 30 年度）

【私の主張】

国語科における学力、とりわけ「読む力」の向上には、「読む方法」の具体化が欠かせない。「読む方法」が不明瞭であれば、生徒は教材とどのように向き合うべきかが見えず、教材に対する読みが表層的で、曖昧なものにとどまってしまう。生徒が授業の中で「読む方法」を主体的に身に付けられるような授業を構築し、さらにそれらを活用できる状態にすることで、確かな学力（読む力）の向上につながると考える。

１　研究主題の設定

「ルロイ修道士は、『私』のことを大切に思っていると思います。なぜなら再会したときに『私』が悲しまないように行動していたからです。」これは、中学三年生で『握手』の授業をした際に、**生徒 A** が書いたルロイ修道士の人物像についての言及である。自身のこれまでの実践を振り返ると、このように生徒の読みが“なんとなく読めた”段階で止まることが多いと感じていた。教材に対する生徒個々の「読み」は示されるものの、その根拠になる叙述や表現が曖昧である。これは、“教材とどのように向き合うべきか”が生徒の中に確立されないまま授業が展開されてしまっていることに、一因があるのではないかと考えた。

我々が扱う教材は、単なる文字の集合体ではなく、意味のある言葉が一つ一つ連なり、形作られたものである。一つ一つの言葉との向き合い方、すなわち「読む方法」を生徒に身に付けさせ、それらを活用できる状態にする授業こそが、私の目指すべき授業だと考えた。ただし、「読む方法」は教師から生徒へ一方的に与えられるものであってはならない。生徒が自ら「読む方法」を獲得することで、「読む力」の向上につながると考える。

しかし、阿部（2025）で「読む方法は具体的であるだけでは不十分である。それぞれが羅列されているだけでは、十分に学力として保障できない」と指摘されているように、単に「読む方法」を習得しただけで国語の学力が向上するとは限らない。阿部（2024）では「読む方法は体系的であることも求められる」とし、次のような過程を踏んでいく読み方が、文学教材の体系的な読みとして提唱されている。

①構造よみ	⑴作品の導入部―展開部―山場―終結部に着目する。
	⑵クライマックスを軸とした作品の形象の方向性・つながりやしかけを読む。
②形象よみ	⑴作品の鍵となる語句や文に着目し取り出す。
	⑵取り出した語句や文の形象を、技法や様々な方法で読み深めていく。 その際に文脈を重視する。その延長線上で主題を把握する。
③吟味よみ	⑴作品への共感・違和感を意識しつつ再読し、評価・批評・吟味を行う。
	⑵吟味文を書き、交流する（「読むこと」から「書くこと」への発展）

自学級では文学の読みが〈①構造よみ〉にとどまる生徒が多いのが現状である。本研究ではまず、〈①構造よみ〉ができることを基本としつつ、一つ一つの言葉、すなわち「鍵となる語句」に注目しながら〈②形象よみ〉ができる段階まで生徒を到達できるようにし、「読む力（確かな学力）」が向上した姿を目指す。

２　研究仮説

生徒が自ら「読む方法」を獲得・活用し、一つ一つの言葉・表現に着目した具体的な読み方ができれば、国語の確かな学力（読む力）を身に付けることにつながるだろう。

３　研究の内容と方法

本研究では、二つの教材での実践を経て、手立ての有効性について検討する。

（１）「読む方法」を生徒自ら獲得し、活用する実践（３年『俳句の世界』 R7.5）

（２）獲得した「読む方法」を他の教材で活用する実践（３年『初恋』 R7.10）

また、手立ての有効性を検討するため、以下の二つの視点から成果と課題を分析する。

・各教材における、パフォーマンス課題への解答のようす

・各教材における、生徒の振り返り

４　研究の実際

（１）「読む方法」を生徒自ら獲得し、活用する実践

単元名：「良い俳句」とは何か　～俳句を読む方法を自分たちで考え、活用しよう～
『俳句の世界／俳句十句』（三省堂『現代の国語　３』　令和７年５月実施

この単元では、生徒が「良い俳句」の条件について自分たちで考え、それらを踏まえて自ら俳句を詠んだり、評価したりするという活動を行った。なお、生徒が理解しやすいように、本単元では「読む方法」のことを「良い俳句の条件」と表現している。単元全体の流れは以下のとおりである。

⓪「夏」をお題に全員が俳句を詠み、誰の俳句が最も優れているか考える。
① テレビ番組「プレバト！」で紹介された俳句三句から「才能アリ（良い俳句）」を探し、「才能アリ」の条件について検討する。
②『俳句の世界』『俳句十句』を読み、①で出た「良い俳句の条件」を確かなものに更新する。
③ 前時までに作った「良い俳句の条件」を踏まえ、改めて「夏」を題にした俳句を詠み、句会を行う。

本単元は「夏」を題にした俳句を一人一句ずつ詠み、それらを相互評価するところから始まる。ここで生徒は「俳句を評価する手段がない」「何が“良い”のかがわからない」という気付きを得た。その後、**図１**に示した「プレバト」で扱われた俳句三句を比較した。「俳句③が才能アリだが、それはなぜだと思う？」と教師が問うと、生徒は「『や』があるとそれっぽい」「直接書かなくても、ブランコが想像できる」など、その理由について考え始めた。

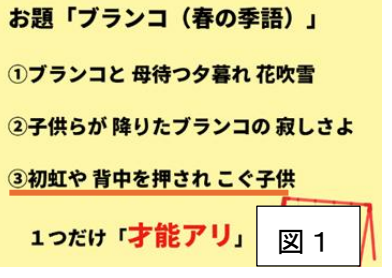

図１

２・３時間目では教科書本文や教科書掲載の俳句から、生徒たちが「良い俳句の条件」を更新した（**図２**）。「直接言わなくとも伝えたいことがわかる」のように、前時で触れられた〈省略〉に関する言及が出たり、「が」や「は」などの助詞の扱いに言及する意見が出たりした。

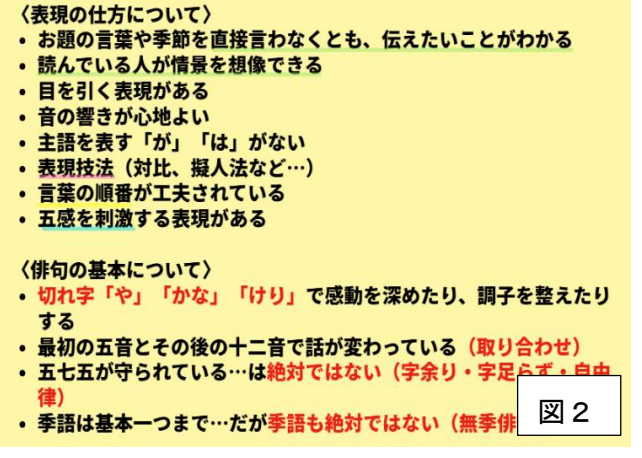

図２

本単元の終末では、生徒が作った「良い俳句の条件」を踏まえ、改めて「夏」を題にした俳句を詠んだ。その後、生徒全員の俳句を並べ、句会を行った。句会の際も評価基準となるのは自分たちで作った「良い俳句の条件」である。単元の最初では「俳句を評価する手段がない」と感じていた生徒たちだったが、「良い俳句の条件」という「読む方法」を会得することで、活発な意見の交流が行われた。以下は生徒の話し合いの中で出た発言の一部である。

・そもそも「夏」の俳句に「夏」と使うのはシンプルすぎるのではないか？
・「打球音」という言葉が使われていると、自然と夏をイメージする。甲子園とか、高校野球とか。
・「雲の峰」「夏の浜」など体言止めがたくさん使われていて、力強さを感じていい。
・切れ字を使っている人が多い。何を伝えたいのかがわかりやすい。

さて、単元冒頭と終了時に**生徒 A** が詠んだ俳句と、振り返りを以下に掲載する。

１時間目に詠んだ俳句：夏祭り かき氷食べて 美味しいな
最後に詠んだ俳句　　：**夏の宵 心臓と響く 落花の火**

〈振り返り〉
どのように表現すれば自分の思いが伝わりやすいか、考えて詠みました。花火を見ているときに大きな音で体が揺れるような感覚を、「心臓と響く」という表現で表しました。

生徒 A は俳句を詠む際に、「心臓と響く」という表現を考え出すのに多くの時間をかけていた。始めは「心臓が響く」という表現だったのだが、助詞の使い方にこだわり始め、「心臓と」と変えた方が花火と自分の一体感が伝わると考え、最終的な表現に至った。**生徒 A** をはじめとする多くの生徒が、単元冒頭と比較すると、表現を洗練させた句作に至ったことがうかがえた（**別紙資料①参照**）。このことから、生徒が自ら「読む方法」を考え、活用したことが、表現の変容につながった可能性がある。

（２）獲得した「読む方法」を他の教材で活用する実践

単元名：視点を決めて、作品について語ろう　～今までに学んだ読み方を生かして批評しよう～
『初恋』（三省堂『現代の国語　３』　令和７年 10 月実施

この単元では島崎藤村の文語定型詩「初恋」を題材にし、「良い俳句の条件（読む方法）」を再活用し、生徒たちが自分なりの読みを進められるかを検証した。「初恋」を検証の場としたのは、**①俳句と同じ韻文であること ② 俳句に比べ、読みの対象とする言葉が多く、「読む方法」を使える場面が増えること** の二点が理由である。生徒たちは、俳句という限られた音数の作品の中では十分に「読む方法」を生かして、一つ一つの言葉に注目した読みを展開することができた。では、この「読む方法」を生徒が想起でき、また、他の教材でも転用できるのかという点について、本単元における生徒の様子を基に考察した。

本単元は学級全体での音読から始まった。何度か音読を繰り返した後、詩の特徴（今まで学習した詩と何が異なるか）について話し合った。そこでは「表現が古文っぽい」という文語詩の特徴と、「リズム感がある」という定型詩の特徴が、ともに生徒から挙げられた。「リズム感とは具体的にどのようなことか？」と教師が問うと、「七音と五音でできている」というものが出てきた。「今までの学習と関連性は？」と問い返すと、「短歌とか、俳句とか」という発言が出てきた。ここで生徒たちは自然と本単元と俳句の単元のつながりを自覚することができた。２時間目では連ごとに情景を図示する活動を行い、詩の情景を把握した。そして、３時間目に批評文に挑戦した。批評文を書く際は「この詩のおすすめできるポイントは何だろうか。それぞれが視点を決めて批評文を書いてみよう。」と指示を出した。以下に、**生徒 A** の批評文の一部と、その振り返りを掲載する。

（前略）この詩は文語定型詩なので、読んでいるときの音がとても心地よいです。私は特に「に」「を」「の」などの、繰り返し出てくる一文字ずつに注目しました。これが繰り返し使われることで、リズム感が生まれます。また、その後の一文をさらに際立たせる効果もあると思います。（後略）

〈振り返り〉
初めて文語定型詩を読んだけど、今まで勉強してきたことで何とか読めました。ちゃんと一つ一つの表現には意味があることが、自分で作文を書くときや、他の人の作文を読む中でわかりました。

生徒 A は前単元の課題同様、「助詞に注目する」という「読む方法」を足掛かりとして批評文を書いている。―線部を見ると、単に「助詞に注目すればよい」という意識だけでなく、助詞が作品に与えるリズム感などの効果にまで言及している。また、振り返りを見ると、生徒 A は今まで勉強してきたことを活用したことを自覚し、意図的に活用していたことも見て取れる。他の生徒も、俳句での学びを踏襲し、批評文を書くことができていた。

５ 研究の成果と課題

生徒 A は、「助詞に注目する」という「読む方法」を身に付けたことで、一つ一つの言葉・表現に注目した読みができるようになっていった。「初恋」の批評文を読むと、「助詞に注目する」という視点を身に付けたことで、作品の優れた点に気付き、作品を評価できる段階にまで至ったことがうかがえる。ここで、学級全体の読みが、どのように変容したかを見ていきたい。

〈「握手」の課題作文における生徒の「読み」の到達度〉

課題：あなたはルロイ修道士をどのような人物だと考えるか。「私」との関わりを踏まえて書きなさい。

①構造よみ	作品の構造を俯瞰的に把握する段階	１１名
②形象よみ	**鍵となる語句**や文を取り出しながら、読みを深める段階	１５名
③吟味よみ	作品を再読し、優れた点や評価できる点などを見つける段階	０名

「握手」の課題作文では、「鍵となる語句や文を取り出」す〈②形象よみ〉にたどり着けない生徒が多かった。

〈「初恋」の課題作文における生徒の「読み」の到達度〉

課題：この詩のおすすめポイントについて、あなたなりに論じる批評文を書きなさい。

①構造よみ	作品の構造を俯瞰的に把握する段階	２名
②形象よみ	**鍵となる語句**や文を取り出しながら、読みを深める段階	１７名
③吟味よみ	作品を再読し、優れた点や評価できる点などを見つける段階	７名

「初恋」の批評文では、ほとんどの生徒が〈①構造よみ〉を脱却し、〈②形象よみ〉以上の段階に分類された（**別紙資料②参照**）。両課題は教材及び課題形式が異なるため、到達度の人数を単純に比較することは難しい。しかし、「初恋」の批評文では具体的な言葉や表現に着目して読みを深める生徒が多く見られた。このことから、俳句の学習で獲得した「読む方法」を他の教材で応用できる可能性が見えてきた。

省略	表現技法	音の響き	五感の活用	助詞の工夫	その他	方法なし	計
１３	５	２	２	１	１	２	２６名

また、この表は生徒たちが「初恋」の批評文を書く際に用いていた「読む方法」を、人数ごとにまとめたものである。〈その他〉〈方法なし〉の３名を除き、大半の生徒が俳句の学習で身に付けた「読む方法」を活用している。この結果からも、自分たちで考えた「読む方法」が、生徒の読みに影響していたことが考えられる。

生徒の作文を分析した結果、「初恋」の課題では、具体的な言葉や表現に着目して読みを深める生徒が多く見られた。二つの単元の学習を通して、<u>自分たちで「読む方法」を考え、身に付け、活用する</u>という学習過程が、生徒の具体的な読みを促す上で有効に働いた可能性が示唆された。

しかし、〈①構造よみ〉にとどまってしまった生徒が２名いたことや、〈③吟味よみ〉に到達しきれなかった生徒が多かったことは、今後の指導の課題にしなければならない。

また、今回生徒たちが習得した「読む方法」を文学教材全般に活用できるよう、指導を続ける必要がある。例えば、批評文を書く際に多くの生徒が意識した「省略」に注目することで、文学教材の中で明示されていない登場人物の心情や、作者が込めた思いを読み取ることにつながると考える。こうした読みを促すことができるよう、今後の授業を構想していきたい。

６ 引用・参考文献

・「読み」の授業研究会、阿部 昇 他（2025）『授業で確かな国語の学力をどのように身につけさせるか』学文社
・阿部 昇（2024）『三訂版 国語力をつける物語・小説の「読み」の授業』明治図書
・小林 康宏（2024）『「言葉による見方・考え方」とは何か』明治図書